

歌 三十首

三ヶ尻 妙

初雪はすんすん積もり銀世界この暫くを無垢でおりたし
冬枯れの遊水池には蓬萌え凧高く泳ぎ此処は早春
いそいそと何を目標めあてに励みおる短き日々よ梅は一輪

高齢の女性等の傘カラフルにばあっと花咲く雨の停車場
妙高の雪解け水は滾たぎちおり白く砕けて青き流れに
まだ先と思えど時はすぐに来て旅は瞬時に過去の頁に
夕べには雨になるのか昏き昼屑籠のバナナ激しく香る
廃屋に紫紺のサルビア咲き乱るトンガリ屋根の過去の栄光
両脇にかけがえのない友座り富士に真向かいロープウェイ下る
空蝉うつせみの擬宝珠の茎にしがみつく生命をかけて羽化せし証し
禁断の机のような亡き夫の引き出しそつと開いてみたり
触れたれば壊るる如き小さき手小さき足のみどり子動く

モネ描く「庭の女」より新年にどしの始まる日々を享受し生きん
ヒヤシンスの紫匂う新年は抗う術なく時刻みゆく
膝に置く鯨のカツの匂い立つ驚く息子の顔が浮かび来
ひたひたと房総の沖ゆ春寄せて菜花は卓に緑鮮やか
去りし日の君の想い出のマッチ擦る喫茶であつく語る眼差し
彼の人は稀に我がこと憶いしか早春の径に桃花咲き満つ
泣き疲れしやくりあげつつ眠る孫見ることのない未来を抱きて
今日こそは麦藁帽子を捨てに行かん友と歩きし遠き夏の日
遙かなる水平線より力溜め潮騒高く怒濤打ちつく

楊梅やまももを含めば遙けし父母の里祖父母の里も誰あれもない

夜半に醒め残りの時を刻みつつ闇をさまよいあかじき暁を待つ

秋は来ぬ哀しみの色滲ませて焦燥は胸一杯にあふる

唐突に秋は訪れ鎮守様思わず零す青き団栗

沙羅の葉はオレンジに染まり愛犬はひたすら静かに死の時待ちおり

燦燦と変わらぬ光注ぐ朝生れ出ずるか新しき歌

新春の鏡の貌を見つめおり負けずに明るく生きねばならぬ

氷雨降る花壇の上に我が袖に形見の時計濡らさぬように

深々と臘梅の薫り胸底に吸いこみ繋ぐ新しき年